

遺句集

武庫坊

春城
武庫坊

遺句集

武庫坊

題字・カット
春城
武庫坊

序

春城武庫坊氏の一周忌を控え遺句集発刊を思い立たれた年代さんからお電話をいただき作品集が送られてきました。何事にも真面目で真面目から向き合う質の武庫坊さんはとびきりの真人間です。どちらかと言えばやや朴訥で無愛想に見える節もありますが、人にお上手を言わぬところに私自身ぞっこん惚れ込んでいました。

一昨年夏の「第二十五回夜市川柳大会」では、昭和五十七年六月分の第一回の投句から連続二十五年間一度も欠かさずに武庫坊・年代さんが投句を続けられた事への感謝と畏敬の念を込めてお二人に別々のトロフィーを差し上げる事が出来ました。武庫坊さんは亡くなられた月も、年代さんは現在も投句を続けられています。

ある年の秋の大会での中尾藻介選の天位「カラスのカーの何処が悪いというのです」そして「年代」の呼名がありました。ひととき会場にどよめきがあつた事を今もはっきり記憶して居ります。

武庫坊さんの作品を見せていただいたところ、あるワあるワ私の知らなかった宝石の様な作品がざっくざっくと出て参ります。

猫の家出

七月の蝉は真面目に鳴いている

アリランとおけさが混じる花見酒

台風は何処ラジオまわせば黒人霊歌^{かぜ}

おぼろ月猫の家出を知っている

ラムネ飲む少年の日の顔をして

ちよつとずつ夢を削って生きている

湖東三山鐘が紅葉に彩添える

風にふれ花は誇りを取り戻す

大根の味の深さを知る寒さ



粽食べて昔話がしたくなる

竹の子は竹に野良猫親になる

てのひらに時々昔聞いている

うっとりしてしまう作品のほんの一部です。

次に年代さんとの暮らしのあれこれをいくつか紹介しますが惚れ抜かれ愛し通されたこの世で一番仕合せな年代さんが次々に現れます。あのだ偏屈なところもある背の高い男をバイオリンを奏でる手首のしなやかさで暮らしをリードされている年代さんが見えて参ります。

梅田 発

打ち易いボールを妻は投げて来る

しつかりと妻が押さえている梯子

二人米寿氏神の加護ありがたい

恋一途地雷の上を走り出す

二人だけの祝日があり老い楽し

梅田発河原町までよく喋る

眼を病んだ妻に草笛吹いてやる

振り向くと妻より外に誰も来ぬ

雨名月夫婦目薬さしている

傘に書かれたあの娘と暮らし六十年

米櫃が空でも妻はあわてない

春夏秋冬妻の変わらぬ音がする

笑うしかないぼろくそに言われたら

昭和十八年九月に立命館大学専門学部高等商業科を三年で繰り上げ卒業し、二十二才で二人は結婚。結婚生活は二ヶ月で出征、この時代さんは長女を身籠もっていました。

武庫坊さんは中国各地を転戦し、昭和二十一年六月無事復員。

戦友

出し抜けに進軍ラツパ鳴る夢も

特攻の友かお盆に星が飛ぶ

満洲中支地名を聞くとなつかしい

戦友の幻を見た熱帯夜

戦場で鍛えた足だまだ動く

祈っては細る戦友会名簿

尚、三明町に塔の事務所が置かれていた平成二年十月より七年十月までの五年間、川柳塔社の有能な会計係として経理状態を揺るぎ無いものにされ、大きな功績を遺されま
した。

平成二十一年七月十七日

草木庵にて

川柳塔社主幹 河内天笑

子や孫に
銃は待たぬ
新世紀

武庫坊



森を抜けると風は無色になって吹く

(川柳塔社一九九〇年度各地柳壇賞)

老いの心を時々春の陽にあてる

雪を見て木彫の熊の眼が光る

雪の夜に埴輪に語る恋懺悔

バス停で一円玉がふるえてる

京言葉いけず やんわりあとで効き

歩道橋上がると空も高くなる

娘と孫がこの世の土産とも思い

無蓋車がつんできたのは寒さだけ

一杯のコーヒー　　ペンを走らせる

平凡に生きて片減りしない靴

春うらら昔の脚が欲しくなる

癌と闘い遂に全弾撃ち尽くす

(舎弟逝く)

ひらがなの小言が強く胸を打つ

のらくろとダン吉がいる父の部屋

妻と歩くと矢印なんか気にしない

鯛にも立春 神が宿ります

千年の杉を支える木の根っこ

青い鳥探す紙ヒコーキを飛ばす

仁王の腕に時々おこる神経痛

モスクの裏で神の言葉が宙に舞う

まねき立ち京は師走の顔になる

妻に似た福娘から笹を受け

終焉に笑える為の日を重ね

年金の夫婦毎日漫画です

市長さんの代理の代理祝辞読む

いらちでもぐずでも時計持っている

岸辺からすぐ深くなる父の海

牙抜いた鬼が男性化粧品

昭和の皺を平成の風が掘る

七月の蝉は真面目に鳴いている

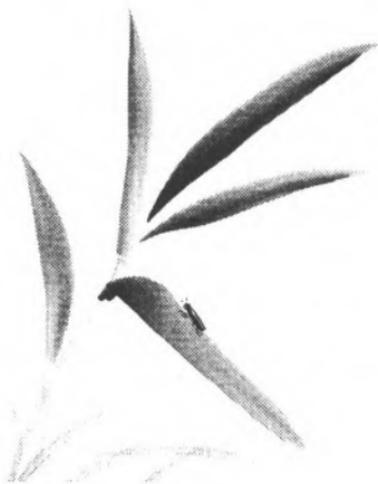
盆間近祈る姿の蟬転ぶ

偏見も飲んで男の顔になる

炎帝の夜遊びですか熱帯夜

蛇の目打つ雨音昭和なつかしむ

祈り終われば母に似ている観世音



クレバスに登攀の夢埋めたまま

弥陀を彫る石は静かに呼吸する

炎天下影がないので蹴つまずく

木彫のアイヌ笑うと雪が降ってくる

海峡秋 男も鳥も消えて藍

金婚を越えると妻は風になる

台風は何処ラジオまわせば黒人霊歌

朝の画廊に秋の空気が正座する

寒の月少し思考を歪ませる

からの鳥籠冬の空気が棲んでいる

デートリツヒの脚が話題のクラス会

打ち易いボールを妻は投げて来る

影武者は闇の深さを知っている

ボタ山の風はアリラン口ずさむ

熟年の少々狂う腹時計

木の橋に蛇の目が欲しい雨が降る

アリランとおけさが混じる花見酒

おぼろ月猫の家出を知っている

女は昨日男は明日を考える

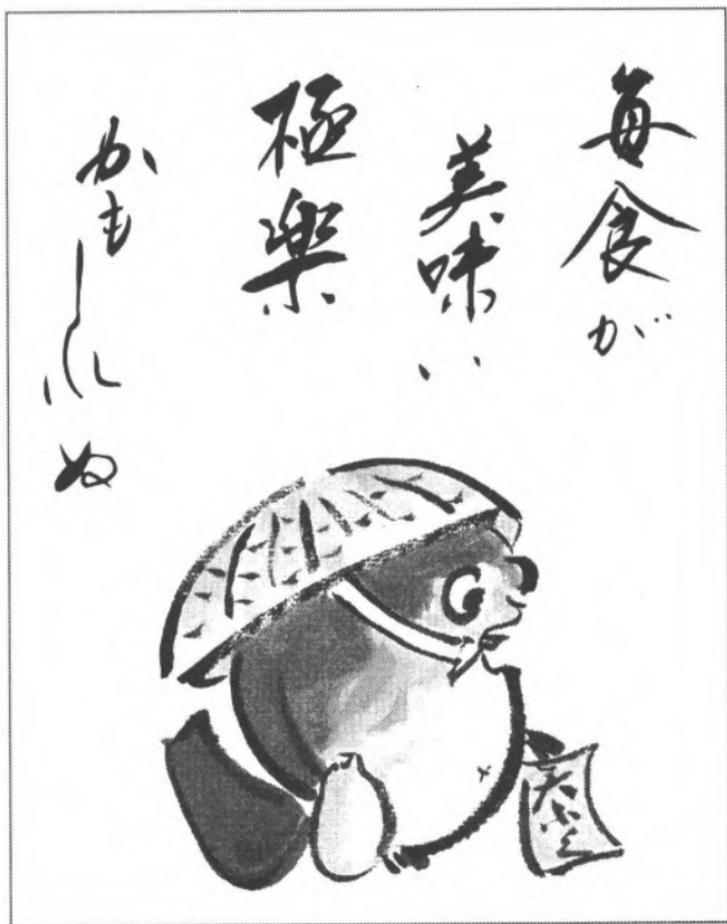
しっかりと妻がおさえている梯子

窓際の椅子でスプリングが弱い

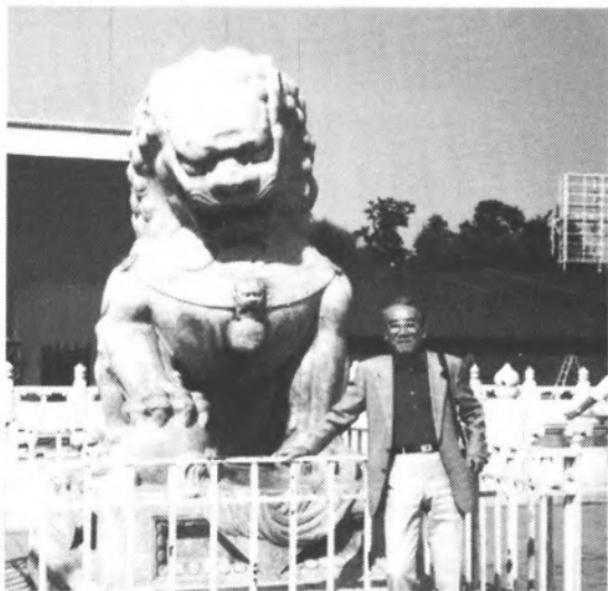
志違い自分の絵が描けず

経本の手垢が罪を消した跡

熟年の道は頭で歩いてる



川柳塔社より
中国旅行九句



着陸の上海空地すすき揺れ

玉肌の釈迦如来像に三拝す

千年の歴史抱いてる宝帯橋

纏足をいたわる老いの足平和

天安門上覇者のまなこで北京見る

地下軍団三千年を守り抜く

裸灯並んで秋天月餅よく売れる

夕暮れの虹口公園太極拳

三千の剣の丘に立つ斜塔



料亭とみまがう行灯月心寺

番付発表浪花に春が来る知らせ



千秋楽 賜杯に日本一の顔

千秋楽の大阪場所はモンゴル場所

胡粉には抗する赤も青もなし

ラムネ飲む少年の日の顔をして

未晒しの白が一番よく似合う

お伽話はまだ始まらぬ宵の月

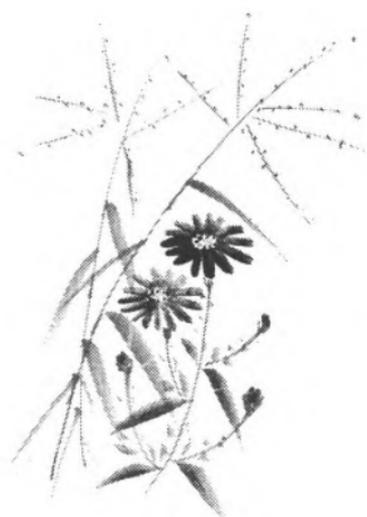
核ニユース埴輪まばたきせず聞く

ボタ山の唄を忘れた風の町

迦陵頻伽亡母に調べを伝えたか

長寿と言われこれから先をどう生きる

森林浴軽音楽の肌ざわり



満蒙にあこがれた日の黒い髪

出し抜けに進軍ラツパ鳴る夢も

銃眼からのぞくと人は敵に見え

特攻の友かお盆に星が飛ぶ

腰抜けの撃ったピストルよくあたる

無蓋車通過遠い戦野の雲浮かぶ

黄塵萬丈騎馬民族の幻か

戦友の幻を見た熱帯夜

梅小路駅旗に送られ征ったまま

中国の捕虜で始めてした田植え

ひっそりと輜重輸卒の墓一基

兵の墓風がなさけを積んでいる

終戦日南支宝慶思い出す

空爆の響きが脳にまだ残る

陽のあたる場所は避けてる兵の墓

暑くなるときつと野戦の夢を見る

満洲中支地名を聞くとなつかしい

戦友会もうすぐ死語になる言葉

階段を昇りきれない神という

「ふあうすと川柳社」創立六〇周年記念大会秀句

阪神淡路大震災

雲は流れ倒壊ビルはそのまんま

点鐘の会 阪神淡路大震災三句

夙一号なじみの蕎麦屋店を閉じ

地が狂う阿鼻叫喚に神ありや

被災地の亀裂で神は眠ってる



点鐘の会 十一句

何かが欠けて老人らしくなっていく

春風のリズムに乗れぬ古時計

まだ爪が伸びるまだまだ生きられる

ハテナマークの型で蚯蚓死んでいる

ペイオフを気にする預金ないけれど

ぶらんこに秋風だけが乗っている

いつか翔ぶ

蝶を心に住まわせる

桜満開

春の心を開け渡す



月の砂漠越えたらくだはどこへ行く

何よりも健康だけが欲しい日々

齡重ね流れが読めず無為徒食

逆転勝利のゴールを蹴った足光る

母はいまどこ京は粉雪舞ってます

鐘の余韻は弥陀の足音かもしれぬ

孫結婚爺は結婚六十年

父の死角に母の情けが置いてある

もう七月体重増えぬ日が続く

胃に異物あるのか咳がまだ続く

絶食二日胃の腑をおさえて終日寝る

(胃癌の手術 二〇〇七年)

生きたいと素直に思う話する

ナースの声が爽やかでよい目覚め

一つ覚えて二つ忘れて日が暮れる

正しく生きて龍頭しっかり巻いておく

ちよつとずつ夢を削って生きている

北を向く御陵は一つ公卿哀史

浅い縁にとても大事な水子像

湖東三山鐘が紅葉に彩添える

残暑まだ続き熱帯魚のあくび

愛想よく呼ばれて肩を叩かれる

秋蝶がまだ飛んでいる政治不安

父の絵をめくると軍歌になってくる

二人だけの祝日があり
老い楽し

雨が降ったら

歩いてみたい嵐山



梅田発河原町までよく喋る

自販機のビール静かに出ておいで

花水愛の言葉を閉じこめる

下駄を履く足の先だけ秋になる

晩夏光勝者に長い影与え

医者と寺あり安住の灯をともす

一畳の畳があれば夢を見る

ピエロの鼻が道頓堀に落ちている

岩下志麻と妻を比べたことはない

妻だけに聞こえる鈴を振ってみる

散り急ぐ桜は知らぬ自衛隊

眼を病んだ妻に草笛吹いてやる

ゲートルを知らない足がよく伸びる

元日生まれの米寿しっかり生き抜こう

アカサタナハマとつぶやき辞書を繰る

半跣思惟の指から春がこぼれ出る

赤鉛筆持つと教師は眠くなる

時計屋百年亡父に見せたい黄の褒章

振り向くと妻より外に誰も来ぬ

美術館出てデフォルメされた僕の顔

影二ついずれは闇に沈むもの

手を握るだけで心が満ちてくる

おまけ人生だから大事にして生きる

雨名月夫婦目薬さしている

曾孫の文二人で読める老いの幸

天馬に乗って大宇宙駆ける夢



傘寿越えあと幾度の正月か

快いだるさで夕日眺めてる

焼きたての秋刀魚湯割を追加する

カレンダーと一緒に揺れている余命

運勢は黒丸どないして生きる

青い背広でああ青春が舞戻る

葉桜やあと幾たびの春が来る

思ひ出の月日を招きよせる酒

愛無限三途の川を渡つても

昭和史を背負い背中が痩せてくる

法事の帰りポケットト京の匂いする

大正の男亦減り師走の風

胸を叩くと生きている音がする

サッカーアメフト京都栄冠三ヶ日

大根の味の深さを知る寒さ

望みまだ捨て切れぬまま明日を待つ

恋一途地雷の上を走り出す

傘に書かれたあの娘と暮らし六十年

米寿までまだ気の抜けぬ橋渡る

み仏が降りてくるまで樹をゆする

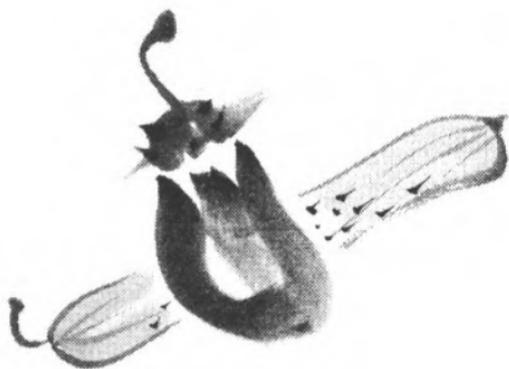
わが街は静か小川に鯉泳ぐ

猛残暑さつき

見たものまた探す

ひびき合う

人に恵まれ秋夜長



二人米寿氏神の加護ありがたい

須弥山につながる紐をさがしてる

春までに影を少うし太らせる

暑さ残って午後の時間がみな狂う

八十路のロマン

上田紬の夏帽子

夢樂し夢また

淋し八十路坂



古伊万里の肌に歴史が滲み出る

季節の話題楳円ボールがよく弾む

駅前広場そこにも冬が落ちている

ボジヨレヌーボ異国の秋を手のひらに

先頭を走り孤独が追ってくる

軽い荷は妻に持たせて街師走

お屠蘇きげんで箱根駅伝応援す

少年の日と同じ夢見る春間近

薫風句集読み始めると止められぬ

復員で抱いた子今は孫三人

歳をとつても薔薇は真つ赤な花が好き

風にふれ花は誇りを取り戻す

心地よし寝ばなに妻の団扇風

我は海の子唄い　も一度泳ぎたい

紫香先生がお彼岸の鐘聞いている

甘い言葉でゆつくり廻る夫婦独楽

生き抜こう二人で米寿あと二年

歩けたらおいでと青谷梅が呼ぶ

湯割り焼酎語る世界を持つ二人

休肝日の予定が狂う春曆

背をさする妻の手 母を思い出す

お母さん天国菖蒲湯ありますか

全身の捻子がゆるんでゆく月日

思い出が身辺整理遅らせる

同窓会解散　米寿になりました

川柳塔社二〇〇八年度各地柳檀準賞

お荷物にならないように生きたいな

喉仏 かなごの春通過する

米櫃が空でも妻はあわてない

まじめの杵を少し外せば生き易い

おみこしの屋根で度胸が舞っている

八十路半ば自分自身に期待する

額ずけば石佛亡母の頬に似る

アルバムに二人のロマンセピア色

箱三つやっぱり大きいほうがいい

いろいろな汗があつまる終電車

ありがとうほんの五文字にある重み

山鉾巡行鉾の目方を測る旅

千本の菊を束ねて神を呼ぶ

青春も戦野も無限昭和消ゆ

しゃべりすぎてどっとさみしさ湧いてくる

次々と明治が消えて寒い春

モネの絵を飾って蝶を待っている

伴走の妻のおかげで今日を生き

流れ着く岸がわからぬ新世紀

粽食べて昔話がしたくなる

祇園ばやしが駅に流れて夏招く

捨てること覚えて心広くなる

負けた日はバツグに入れる野球帽

三の矢をあてる自信が顔にない

耳二つ仏も鬼も私も

あやまちを許してくれぬ冬木立

闇の深さ知らずに闇を歩いている

信号を疑いなしに渡れるか

几帳面に薬を飲むが酒も飲む

もうそろそろ神の返事が来る頃だ

捕鯨禁止港動かず風吹かず

笑うしかないほろくそに言われたら

幽玄の世界で揺れる太郎冠者

曾孫誕生成人するまで生き抜くぞ

齒の奥に禁句が一つひっかかる

嘘詰めた箱はすっぽり底が抜け

晩酌で今日のバランスとって寝る

屋根裏に父の小言が積んである

季節の話題楯円ボールがよく弾む

郵便受けにほんのり春の気配する

浄土今賑やか明日は花祭り

七夕の空にミサイル飛ばぬよう

鶴を折る手順忘れて老い自覚

情けあることば待ってる老いの坂

防災訓練逃げる支度は出来ました

万国旗中になびかぬ旗がある

名前より先に齡見る訃報記事

昔半どん気楽に羽根が伸ばせたが

春夏秋冬妻の変わらぬ音がする

亡父の背中流したように墓洗う

竹の子は竹に野良猫親になる

墨痕哀し砂丘を越えて浄土まで

(薫風先生へ弔吟)

曾孫のほっぺ笑うと押してみたくなる

祈っては細る戦友会名簿

青春の夢秋の落暉に溶けていく

戦場で鍛えた足だまだ動く

てのひらに時々昔聞いている

神の声聞こえそうなり冬の月

二人米寿迎える年だ除夜の鐘

曾孫見舞いに百まで生きろと書いてある

虹追うて渡った橋が戻れない

妻よ許せ死ぬ順番は選べない

跋

墨
作二郎

七月十七日祇園祭山鉾巡行の日、テレビは今四条河原町の辻回しを見事に成功させた長刀鉾の戻り囃子を流している。

七月に入って啼き出した蝉は今も激しく啼き続けていた。例年のことで殊更に珍しくないが、今年は特段に暑い夏を感じさせる。朝早くから気温が上昇して、気だるさの一日は我慢ならない。年老いると共に心身の弱りは当然だが、汗拭きタオルがびっしょり濡れる気分の悪さはこの上ない。とに角汗だくの毎日を過ごしている。それでも住吉御田植の様子を気にかけて、祭日の行事の色々な心浮き立ち、楽しさを忘れずに出掛けるの

である。これも満たされなかつた戦争時代を経験して、それを充足することと、生来の遊行趣味を通じて、今後を生き抜く心情の支えになろうと心得てのことであろう。

思えば川柳を書き続けて長くなつた。今では私よりも年長で現役で川柳活動を続けて居られる方も少なくなつてゐる。それら先達から懸命に川柳のあるべき姿を学ばせて頂き、その実作を通じて生き方を教えて頂いたと思つてゐる。近年目立って、それら優れた川柳作家が消えてゆくのは何よりも淋しく、残された者として今更に川柳のこれから難しさを感じるばかりである。力の限りに今後を活かす川柳の道を歩み続けたいものである。徒に不甲斐なさや無力感を嘆いてばかりで解決する事は何も無い。今はそう思つてゐる。

春城武庫坊さんが亡くなつてもうすぐ一年になる。その葬儀の日は曇天で、蒸し暑かつた。駅からの道は川沿いで橋が何本も架かつてゐた。蝉はもう啼かなくなつてゐた。汗を拭きながら式場に駆けつけたのを憶えている。武庫坊さんの最期は、とてもおだやかで安心の顔が何よりだつた。そして奥さんの年代さんが悲しみを抑えて健気に振る舞

われていたのが印象的。

お二人は京都伏見で同じ年に生まれ、同じ小学校に通学していたそうである。お互いを知り尽くしてこれ以上のことはない。そして共通の趣味として川柳があったと聞かされた。私との出会いの頃は思い出せないが、お二人が川柳塔社の重鎮で良き指導者黒川紫香氏に師事したことから、その傘下の小集句会に参加して川柳活動に熱心だった頃のことであろう。川柳人として珍しく律儀で、その作品に乱れない一徹さを感じさせている。月に何度かの句会に同席して親交を深めたものである。或る年指導者不信の思いがあつて私は句会参加を控える様になった。それ以後春城夫婦とも出会う機会を失い今に至っている。私の頑固の性で随分御迷惑をかけ淋しい思いをさせたと申し訳なく思っている。それでも私達の「点鐘」に参加して欠かさず投句を続けて頂いて変わらなかつたことに感謝するばかりである。その一句一句に日常が感じられ、生活の細部が伝えられ読み返して心楽しくなってくる。月に一度は電話してお二人の声から、どれ程励まされたことだろう。去年の春には手術後の経過が伝えられ、その後も体重の恢復の勝れない

のを気づかった様である。祇園祭には山鉾の重量の程が話題になり、その計量結果が新聞に載りテレビニュースに伝えられたりもした。それを句にした気持ちや思うと口惜しさが響いてならない。

この度年代さんの願いがあって「武庫坊遺句集」の発行が果たされる。数多くの作品のどれにも武庫坊さんの魂が宿っている。その中から残すべき作品を選ぶという大役を、お手伝いさせて頂いた。意に沿えただろうかと危惧もあるが、武庫坊さんなれば許してくれると思っている。序文には川柳塔社主幹河内天笑氏の心を込めた一文がある。そして川柳作家春城武庫坊を忘れない多くの仲間が居ることを知っている。それらの心に残る一冊であることを望んでやまない。

遺句集「武庫坊」の出版のお手伝いをして

奥田 みつ子

河内天笑川柳塔社主幹の心のこもった序文、春城夫妻が投句を続けられた「点鐘の会」の墨作二郎主宰の親しみ溢れる跋文、この二篇の文章に飾られた遺句集の紙面を私の駄文で汚すのはためらわれますが、出版のお手伝いをして触れることが出来た事などをあえて書かせて頂くことにしました。

誰もが羨む川柳家の鴛鴦夫婦のことゆえ、きつとご家庭の作句もご一緒と思っていました。二階と階下の別々の部屋とのこと、やはり創作は個の作業なのでしょう。

その為、この句集を作るに当って年代さんが武庫坊さんのノートから句を選び出すのに、作句の時期や背景が分からないことばかりと困っておられました。私も及ばずながらお手伝いをして、武庫坊さんの意図に反しているのではないかと心配になることもありました。

その半面、年代さんが遠慮してわざと省いておられた句。「妻に似た福娘から笹を受
け」「岩下志麻と妻を比べたことはない」「傘に書かれたあの娘と暮らし六十年」など武
庫坊さんの飾らぬ想いの句を句集に遺すように勤めたりもしました。

「岩下志麻と」の句は、ある時期、年代さんが岩下志麻に似ていると言われた頃の句
と思われます。「傘に」の句は傘に書かれた覚えはないけれどと、年代さんは照れて言
われていますが、武庫坊さんはきつと書かれて冷やかされたことがおありなのでしょう。
句集最後の一句

妻よ許せ死ぬ順番は選べない

長身の武庫坊さんは小柄な年代さんをいつも庇っておられたので、胃の手術後
は特に年代さんのことが心配で、さぞ心残りでいらしたことと今更ながら胸が痛みます。
この句集には、武庫坊さんの川柳の足跡と優しい几帳面なお人柄、そして、小学校の
同級生時代から戦中・戦後の苦しみをのり越えた約八十年にわたる愛情溢れる歴史を見
せて頂くことが出来て貴重な経験でした。

これからは年代さんがお元気で武庫坊さんと二人分ご健吟くださいますことを心より
お祈り申し上げます。

あとがき

尼崎いくしま川柳会は一九八一年四月に発足。北浦牧郎先生、黒川紫香先生、紀市郁栄先生のご指導のもとで始まりました。

武庫坊と私はその一年後に入会しております。

句会場のサンシビックには当初各地から名だたる先生方のご出席を頂いたと記録が残っております。

その後、亡吉永伊三郎氏・田中薫氏に次いで武庫坊が代表になって句会も順調だった矢先、体調を崩し癌の告知を受けるはめになりました。あとを引継いで下さる人もなく、その上、出席者の減少もあって、二〇〇八年六月に閉会を余儀なくされました。

生前、句集作成の準備に取りかかっておりましたが、病が篤くなつて、時は待つてくれず、八月の厳しい残暑に力尽きて三十一日に逝去いたしました。せめて遺句集でもと故人の思いを掘り起こす作業を思い立ちましたが、今となつては聞きただす術もなくメモやノートからかき集めた句は順不同でございます。

二人で参加した本社句会、各地の句会や大会、その時お会いできた句友の方々の顔が彷彿といたします。

特筆すべきは今から二十有余年前の一九八四年、一九八六年、一九八八年と川柳塔社主催で三回、中国旅行をさせていただいたこと。そして台湾旅行はその後の一九九一年。今は亡き西尾葉先生、橋高薫風先生、東野大八先生、田中正坊編集長もご一緒に旅のつれづれに諸先生のうんちくのあるお話に耳を傾けつつ幸せなときに浸ったものです。今もその旅の思い出を句友達と話題に花を咲かせております。

園田句会は武庫坊が橋高薫風先生より託された最後の句会でした。充実した和やかな句会であつたとよく話を聞かせてくれました。

武庫坊に今日まで拘わって下さった皆様からお礼申し上げます。そしてこの遺句集出版に当たり、ご多忙のなか河内天笑先生の序文、墨作二郎先生には跋文を賜りましたこと、故人もさぞ喜んでおりました。有り難うございました。

また編集に際しては数々の労をお引き受け下さいました奥田みつ子さんには感謝してもきれない思いでいっぱいでございます。美研アートの山本久美子様にもお世話になりました。近くに住む次女には万般に渡る心労の日々だったと存じます。感謝、感謝です。

ちなみに書き加えさせて頂くと、「武庫坊」の雅号は武庫之荘に在住することから私の冗談で生まれました。

法名の「釋和心」は優しくて和やかな人柄を偲んで感謝を捧げる思いで、お坊様にお許しを乞い名付けました。きつと武庫坊はここまでするかと苦笑していることでしょう。

オカリナの涙そうそうで旅立ちぬ

年代

尼崎医療生協病院緩和ケア病棟にて身罷る。

平成二十一年八月

春城年代



略 歴

春 城 武庫坊 (はるき むこぼう)

本 名 利和 (としかず)

1921年1月1日 京都市伏見区で生まれる

1982年 頃 川柳を始める

1983年4月 高島屋ローズ・カレッジ西宮川柳

教室入会(講師：橋高薫風先生)

1984年6月 川柳塔社同人

遺句集 武庫坊

平成21年8月発行

発行者 春城年代

住 所 661-0035

尼崎市武庫之荘5-25-17

電 話 06-6431-1152

美研アート印刷

